

洋11-65 (ショートコメント)

「モーツァルトの恋」 ★★★

2011 (平成23) 年6月4日鑑賞<テアトル梅田>

監督：カール・ハートル

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト／ハンス・ホルト

コンスタンツェ (ウェーバー家の三女、モーツァルトの妻)／ヴィニー・マーカス

ルイーゼ (アロイジア) (ウェーバー家の次女、歌手)／イレーネ・フォン・メイENDORF

ベートーヴェン／レネ・デルトゲン

レオポルト (モーツァルトの父)／ヴァルター・ヤンセン

アンナ・マリア (モーツァルトの母)／ローザ・アルバッハ＝レティー

ヨゼファ (ウェーバー家の長女)／ズシ・ヴィット

ゾフィー (ウェーバー家の四女)／テア・ヴァイス

皇帝ヨーゼフ2世／クルト・ユルゲンス

1942年・オーストリア映画・111分

配給／T & Kテレフィルム

◆ 『アマデウス』(84年)は神童モーツァルトのそれまでのイメージを大きく変えるすごい映画だったが、1942年に公開された本作は、オーソックスなモーツァルトの恋模様と『レクイエム』で終わる短い生涯を美しい音楽に乗せてタツプリと描くもの。冒頭は私の大好きなピアノソナタ第11番イ長調K331「トルコ行進曲つき」から。そして、ラストもそれだ。

◆ モーツァルトには旅がつきもの。それはモーツァルトの4歳年上の姉ナンネルに焦点をあてためずらしい映画『ナンネル・モーツァルト 哀しみの旅路』(10年)でも明らかだが、本作が描くザルツブルグに住むモーツァルトの最初の旅はパリへの旅。

父親レオポルト(ヴァルター・ヤンセン)を残し母親のアンナ・マリア(ローザ・アルバッハ＝レティー)がモーツァルトに付き添ったが、どうも彼の目的はパリではなくお目当ての女性ルイーゼ(イレーネ・フォン・メイENDORF)に住む近くのまち。ルイーゼはウェーバー家の4人姉妹の次女だが、このまちでモーツァルトが宮廷付き指揮者に就任し、ルイーゼを歌手として成功させることができれば……。若きモーツァルトは、そうもくろんだが……。

◆ モーツァルトの妻は阪田三吉の妻・小春のように、苦労ばかりかけたコンスタンツェ。私はそう思っていたし、実際にもそのとおりだが、モーツァルトが本気で惚れていたのはウェーバー家三女のコンスタンツェではなく次女のルイーゼだったらしい。本作ではイタリア時代のモーツァルトは描かれず、ウィーンで少し成功し、プラハで『フィガロの結婚』『ドン・ジョヴァンニ』などの歌劇をたて続けに成功させるモーツァルトの姿が描かれる。そこで歌うのが、再会したルイーゼだ。

これが仕事上だけのパートナーなら仕方ないが、根っから浮気者の(?)モーツァルトは、シャーシャーとルイーゼへの恋心を披瀝するから、コンスタンツェはたまったものではない。そんな罪つくりなモーツァルトだったが、やはりコンスタンツェは小春と同じように偉い。そんな2人の夫婦像も、本作からしっかりと……。

◆ モーツァルトは35歳の若さで死亡したが、41番までの交響曲、27番までのピアノ協奏曲そしてたくさんのオペラなど、計700曲以上の作品を残している。クラシックの演奏会で『レクイエム』を聴くことは滅多にないが、この曲が有名になったのは、やはり『アマデウス』の最後に何とも不気味な使者からこの曲の注文を受けるシーンが強く印象に残っているため。本作が描くモーツァルトの最後も、これと似たような雰囲気仕上がりになっている。

モーツァルトの主治医は「天才は早く天に召されるのだ」とコンスタンツェを慰めていたが、まさにそのとおり。自分が天才でないことに感謝しつつ、久しぶりにモーツァルトの名曲の数々を聴けたことに大満足!

2011 (平成23) 年6月4日記